

亀山副委員長、いぶし銀のごとく重厚に語る

亀山利夫副委員長



第9号では事務局次長兼会計の勝部博充さん(平田)にインタビューを行いました。今回は副委員長の亀山利夫さん(尾原)に尾原地区ダム対策同盟会長の立場も含めてお話しを伺いましたので、その様子をご紹介します。なお、第11号(4月度発行予定)は副委員長の斉藤文隆さん(槻之屋)にお願いする予定です。

文中の“亀”は亀山さん、“広”は広報部です。

広 尾原ダムを機軸として温泉地区の活性化を図るためには、当面、どんなことが必要だとお考えですか？また、発展性があるとお考えですか？

亀 これまでの限られた固定観念を改め、多様性のある価値観をもち、積極性をもって取り組んで行く姿勢や考え方が大事だと思っています。今後は、ダムやダムを取り巻く自然環境を貴重な地域資源としていかに生かすかが課題であると思っています。

広 雲南市に引き継がれた「尾原ダム周辺地域活性化対策協議会」へ委員として参画しておられますが、その役割や課題等についてお聞かせください。

亀 これは、元木次町ダム対策協議会を引き継いだ組織であり、市執行部、市議会、地元住民の三者代表で構成されたダムに関わる最高の協議機関であり、その役割として、活性化対策を講じ活性化の円滑な推進を図るという目的を再認識し、平成22年(2010年)度完成に向かって、ダム事業の集大成の大切な時期を迎え、更に積極的な活動が望まれていると認識しています。

広 先に立ち上げられた「尾原ダム地域づくり活性化研究会」とは？

亀 これは新しい組織で、2回の準備会を経て去る2月28日に発足した研究会(委員数26人)ですが、「地域に開かれたダム整備計画」の実施計画について具体的な検討や調整を進める機関です。この「地域に開かれた整備計画」は、ダム事業完了までに整備が終わることになっていますが、当初段階で期待していたものが大きく後退していますので、ダム完成後も引続き水源地域整備対策は継続されるべき、との立場で関わりを持って行きたいと考えています。

広 尾原ダムの建設経過や歴史に関する学習会の必要性に関し、去る2月19日に行政部会の主管で事前学習会が持たれ、講師を務められました。その趣旨についてお尋ねします。

亀 ダム対策は、これまで50年という長い経過を経ていますが、その内容について知る人が減り、忘れられていく中で、このダム事業がこの地域の人々のどんな思いの中で今日まで続いてきたかを知り、また、先人たちの様々な思いを偲び、周辺整備や活性化に如何に対処すべきかの方向を地域みんなで考えることが大切だ！との思いからこのたび講師を引き受け、学習会に際しては「斐伊川ダム対策の概要」(昭和61年(1986年)3月木次町発刊、243頁)をその資料、題材として説明を行ないましたが、それは私自信の勉強の為でもあったと思うほか、一人でも多くの方がその資料に目を通してくださり、ダムに対する理解と認識をより一層深めていただけたらと願っているところです。

広 尾原地区ダム対策同盟会の会長職を務めておられますが、本体工事の着工を目前に控え、今後、同盟会としてどのようなスタンスでこれに対応して行かれますか？

亀 ダム直下の尾原地区は、ダム軸から340m~1,100mの距離に18戸が生活しておりますが、最も身近な生活圏の中での本体工事であり、騒音、震動、交通安全、治安維持等のいろいろな不安がある中で、如何に平穏で安心して普段の生活が出来るか、という観点から、安心・安全な生活環境の保全を第一義に対処して参りたいと考えています。

広 松江市や出雲市、またNPO法人斐伊川くらぶなど、下流域の市町や団体との交流について、今後、どのような形が望ましいと思われますか？

亀 上下流の交流を通じて、下流部の協力体制を強化し、ダム完成後の水源地域の整備や維持管理にもつながるような持続性のある交流が必要であると感じています。

